ています。OB・OG会という名称になっているために、卒業生しか入れないという感覚が多少出てきたので、名称を変更して、まちづくり団体報徳塾というような形にしてはどうかという話もでています。私たち40数名おりますが、実際に動ける人は半数になってしまいますので、そこで新たな会員を募らなければならないということもありますので、OB・OG会という名称にこだわってはいけないのかなとは思っています。

成田　最後にプラットホームということがありました、生涯学習的ないわゆるプラットホームという考え方ですが、団体間をつないでいくというような認識でよろしいですか。

黒沼　仮にOB・OG会となった時に、それはNPOであろうと任意団体だろうとかまいませんが、そこに入っている方々が、自分のやっているテーマをもってきて、そこでその運営の中でまわして事業として自分一人で足りなければ人を集めて、そうやって運営していくのがプラットホームだと私理解していますから、OB・OG会がいまどんな形での運営をなされているかが見えなかったのでお尋ねしたんです。

阿久津　いま言われたようなことも入っておりまして、あとは会員同士で協力しあってやっているというのが実態。ほとんど会員でやっているという、いまのところですね。ただ、それにいろんな形で声を掛けるのですが、やはり他の団体も忙しいということで、なかなか一緒にできないというのが実情です。できれば、まちづくりということなので、他の団体も巻き込んだ一大イベントのような形でやりたいというのもあるのですが、いろんな各々活動していますので、その辺は難しいというのが実態です。ゆくゆくはその辺もやっていきたいと。

大嶋　メンバー自体が自分の団体を他にまたもっているのがあるんですね。そこの活動も入っていますから、そういったプラットホームという意味ではそうだと思います。

成田　いま報徳塾さんのお話を聞いていると、なんか非常にいきいきと楽しそうに発表されているというのがわかりまして、たぶん活動もそのようにされているんだろうなということが伝わってきます。阿部さんの場合はNPOの運営について悩みながらやっているのが現実だと思います。今日は行政関係の方が多いようなので、NPOと行政との関係で苦労されている点などがどこにでもあろうかと思いますが、そのところを実際にNPOを運営されている阿部さんにもう少しお聞きしたいと思います。

阿部　グラウンドワーク庄内だけではなくて、NPO法人、私の関係する庄内地域ではいま21団体できているそうなんですが、その中でまともに動いているというか、まともにランニング、財政的にもまともになっているのは福祉系の団体だけだそうです。あとの環境系とか、やっぱりまちづくり系は、どうしても単発のイベントでやっているものですから、財政的な波が大き過ぎて、雇用して事務所をもって１人事務局員をおくなんてできない状況のところがほとんどでございます。そういう中で、まずはこういったグラウンドワーク庄内も、事務局長を１人おいてといっていますが、実質、ちゃんとしてお給料なんて払えていないというのが現状です。それをちゃんとしようじゃないかということで、我々理事連中が奔走するというのが、いまの段階なのかなという感じです。

　それで、別の団体の話ですが、どうしても行政サイドの施策と、市民レベルのやろうとしていることがどうしてもすりあわせができていないんですね。情報共有がなかなかできなくて、この間も我々、新しい団体を立ち上げまして、街中アート、街中パフォーマンス、中心市街地

の活性化のためにやっているのですが、非常に嫌がられました、そのサイドの人たちから。なぜかというと、面白いんだけど、我々は知らなかった。なぜ事前にちゃんと話さなかったということで、嫌がられた事例がございます。そういうことで、なかなかすりあわせをうまくできるような、それこそプラットホームなのかなという気がするんですけれども、その辺りがまだまだ弱いというところがあるかなと思います。

成田　では、うちはこんなふうにしていますよという事例をおもちでしたらお話願いたいのですが。

黒沼　うちはこうやっているという大それたことを言うつもりはないのですが、阿部さんとは昔、行政の支援策なんかでお付き合いしたことがありまして、今日は阿部さんにも会いたかったし、そういう意味で今日は参加したのですが、阿部さんもさきほど言ってしましたし、大嶋さんも昔は行政に使われるVS利用するという構図から違う形にということをおっしゃったと思います。いわゆるいままでですと、行政さんは企業でいう、アウトソーシング、安いお金で労力としてという考え方が従来ありましたが、最近行政さんも考えはじめているところもありますし、私は個人的にはアウトソーシングということから、コーソーシングみたいな、片仮名で恐縮ですが、ただ単に仕事を外注するみたいな形ではなくて、出す方も相手の力を理解して、利用し、そこでなされた成果を自ら持ち帰って勉強する、作業もやり方も一緒になって、委託したからあとは知らないではなくて、一緒になって勉強していくということが、コーソーシングなのかなと思っています。

私自信、個人の会社として、どういうふうに渡したらいいかわからなかった、名簿はそうなっていますが、山形のNPOの専門家ネットワークという、略称プロネットにも入っていまして、弁護士さんから大学教授から司法書士さん、いろんな方の集まりの中にも入っています。そこで行政さんとのコーソーシングというときも、さきほど阿部さんがおっしゃったように、NPOはなかなか経営的に難しいものですから、いかに事業としてはボランティアではないわけですから、営利事業と非営利事業の両方できるわけで、継続するためには金がいること、当然ですよね。だからそこで行政さんの考えていることとNPO得意の領域があるでしょうから、まさに行政に話し掛けて、提案していって、千葉方式とかいわれてやっていますが、そういう形で提案していって、それで行政さんの考えとすりあわせて、ここの部分はNPOさんが考えたもので、ここまで考えたけど、予算が足りないんだけれど、人が足りないんだけど、一緒にやりませんかというのが、共同だと思います。そういう形でやっていくスタイルが、あるのかなと。

事例にもなりませんが、山形で初めてコミュニティビジネスということを山形県が始めたときに、たまたまちょっとした縁で黒子的にお付き合いしてから、最初の年に、個別企業塾と、２つの事業があったんですけれども、相談会とか。その時に募集かけたりしている事業のなかで、阿部さんがやっておられる庄内活動センターさんが考えられた事業が選ばれて、たまたまお付き合いした経過があります。

そういう意味で、行政さんの考え、施策に対して、阿部さんのような市民サイド、あるいはNPOも含めたサイドから、おっしゃっていましたね、できるだけ早い段階から、本当はいまは行政さんが考える段階から市民の知恵をもらっていこうという、だから千葉方式なんか、新聞記事での受け売りですが夜中に集まっているそうです。というのは来る人たちは仕事をもっていますからね。できませんよね。夜中庁舎の電気点けてやって、それを担当の施策に生かしていくということがはじめからなされていると、できるだけお互いの使われる、利用するの関係じゃないものが少しずつでもできていくのかなと思ったりしています。

ですから私たちも４年目に入っていますけれども、県のコミュニティビジネスみたいなとこ

ろも、提案しながら、向こうも聞きながら、４年目の事業も県から総合支庁の事業にも展開されていますけれども、そんなこともやった事例といえるかどうかわかりませんが、そういう感じは最近しております。

大嶋　うちの方も自治研修会という役所の若手の研修会があって、そこに市民が一緒に参加して勉強会をやって、そこで提案することが反映してくれるような形になっています。だからお互いの人間関係がよくできていると、そういう学習会なんかに声をかけてもらえて、意見を吸い上げてくれるということができてきているものですから、意外とやりやすい、意見も反映させてもらえやすいということがあります。

成田　プログラムを組む段階で、行政だけじゃなくて、市民もメンバーに入っているよ、みたいな事例はどうでしょうか。まだそこまでいけない状況でしょうか。

芳賀　白鷹町の芳賀といいます。今日は白鷹学講座の企画委員のメンバー２人と３人でまいりました。２月に結城先生をお招きした講座を開催していたということもありまして、こちらは阿部さんに会いにということでしたが、私たちは結城先生に会いに来たんですが、提供型の講座型の学習会を年５、６回ずつやってきたんですけれども、白鷹町の場合はその都度企画委員の方を募集しまして、学ぶテーマとか研究したいこととか、聞きたい人とか、選定をしていきましょうということで講座を開催しています。12、3、4年の３年間は、男女共同参画というテーマをもちまして、主にそのテーマにそった形で30人ぐらいの企画員で企画してきたようでした。

最近はいろいろな町づくりセミナーですとか、男女共同参画セミナーですとか、いろいろな名前をもっていたセミナーを総括しまして、白鷹学講座としまして、白鷹町を見つめる、山形県を見つめる、家族を見つめる、生活を見つめるというように、テーマを、何で悪いということでなくしましてやっております。企画委員のメンバーは公募ではあるんですが、どなたかがどなたかを誘ってくるとか、私は行政の担当をしているのですが、知っている方を誘ったり、その方からまた誘ってもらったりということで現在は18名ぐらいになってやっているところです。今年は門脇厚司先生の社会力の講座、結城先生のご紹介で、甲斐良治さんという方の農業の関係の講座、それからおすぎさんをお迎えしての子どもたちにいい映画をみせようという映画上映とシネマトーク会と、町出身の政治ジャーナリストの田瀬康弘さんをお迎えした政治、国際問題などの講演会などを行なっています。

企画委員の方々の主な役割は、最初のテーマを見付ける、聞きたい人の案を持ち寄るというところから始まるのですが、PRの段階で目標を、いまの企画委員は昨年度からの、昨年一新なりまして、さっき大島さんの話のなかから、使われているばかりで疲れてきたという、ちょっと本音が聞こえたわけなんですが、その前に４年間ぐらい同じようなメンバーでやってきた企画委員の方が私たちしたいことしたみたいと、なんとなく少し休ませてもらいたいと。で、他の人の考えていることも聞いてみたくなったということで、解散ではないのですが、お休みになって受講生になられたので、企画委員が去年から新しくなったのですが、その間、２年間ぐらい企画委員がいないで、町がお膳立てしてという講習会形式が２年ぐらいあったのですが、集客力が俄然あがっております。200席のホールで、いつもやっているのですが、ほぼ満席ですかね。入場料をいただく場合も無料の場合もありますが、１割ぐらいの自然減といいますか、当日のキャンセルがいつの場合もあるようですが、満席以上のチケットを配布して満席ぐらいの200名ぐらいお出でいただくと、企画委員の方々が、今年あたりになっておっしゃるのが、白鷹学の企画が外れがないので、次もいかなくちゃいけないみたいだねと。寄せていただいていて、もしかしてエネルギーになっているかなと私たちも思うのですが、どうしても社会教育

関係者だけの講座というイメージがあったのかもしれない。さっきテーマを申し上げましたように、たとえば教育問題だと、教師じゃないとだめなのとか。政治問題だと、たとえば議員さんが対象なのというような、イメージがあったのかもしれないんですが、いろいろな方がお出でくださっていて、町から広報誌などで広報するだけでなくて、口コミのネットワークの広さというものを行政マンの私としては非常にやはり大きいなと感じております。たぶん、私たちがいい話だから聴きに来てというように、なんとなく行政にだまされるような気よりも、こちらに菅原さんという方もいらっしゃるのですが、菅原さんがすごくいい話だから聴きに来てと言った場合に、たぶんこの人にだまされてみようという人も来てくれるのだと思うのですよ。そういうネットワークの広がりをすごく感じております。

成田　とても素晴らしい事例と思います。せっかくですので、いまの白鷹町さんの事例に対して、何かお聞きしたいことがありますでしょうか。

黒沼　あくまでここでいう白鷹町の場合ですと、講座ですから、講座をすることが目的で、そこにいろんな人が集まって当然のことながら、先生方をお呼びして話を聴いてもらって、何人集まるかが評価基準だと思っている。だから目的が今市さんみたいにリーダーをつくるという違った視点に立つと、同じような塾とか学とか講座でも、そこの仕組みなり、中身に応じたいろんな形での評価、指標が出てくるんだろうなと思って、白鷹さんの場合、私も別件で、大滝課長さんなんかにも広報なんかでお願いしたこともあるのですが、いろいろそういう目的に応じた在り方があっていいんじゃないかなと。そういう意味で、だから、白鷹さんの場合はそういう形でのやることが目的でなされていますから、いま200席が埋まるというのは非常に羨ましいなと。いろんな講座とかワークショップをして人を集めるのは非常に大変なことを経験しておりまして、だけどおっしゃったように最後は一本釣りなんですよね。人のチャンネルとか人脈で、当然、公の広報、プレス、いろんなところを使ってやって、新聞に載せてもらっても来ない時には来ないし、やっぱりそういうところで、その苦労は感じていますので、いまの話は非常に羨ましい話でした。

成田　そこのところ、どうなんでしょうかね。いまの白鷹町さんの場合は、白鷹学をやられて、その中で企画委員を募集されて、その中で練っていくということが現実的に行なわれているわけですよね。私はその中から違った方向性が見える時期も来るんじゃないかなという形だと思うんです。そこまで行政がいまの段階で期待しているかというのは難しいところがあるのですが、そこまではまだ、お考えになられていないのでしょうか。

芳賀　私たちの講座で、これをやってもらおうという目的とか趣旨があってやっているのではないのかもしれないですね。毎回の話を聴いて、今日お聴きの話の中で、さて自分が何ができるか、それぞれの立場で何か始めてくださいというような問い掛け、声掛けで、開会のあいさつとかセレモニー的なものとか、ほとんどしないようにしているのですが、進行なども企画委員の方々がそれぞれの言葉でしてくださいますので、お話を聴いて、もちろん結城先生の話を聴いた時も、それでは皆さん、それぞれの立場でいまやっていることでよろしくですからといいますか、そういうような声掛けで終わっているような現在ですので、毎回アンケートをいただくのですが、ほとんどが記述式の質問になっていて、毎回集計しているのですが、アンケートが７割から８割の方が書いてくださいまして、ハガキ大の大きさで、ハガキぐらいの厚さで膝に置いて書けるような紙にしているのですが、ほとんど真っ黒に書いてくれるんですよ。書いてあることは、たとえば行政はこうしてくださいとか、学校はこうしてくださいとかではな

くて、私が考えてきたことがこれで良かったと思ったとか、親が言っていたような気がしたとか、何となくみんな、各自を振り返ってくれているのかなと思って、またその結果なども発信しているのですが、その中から次のテーマを探したり、してはいるのですが、持ち寄りの食の文化祭を結城先生に２月に聴いて、やってみたいなという漠然とした夢は持っているのですが、とりあえずこの間、企画委員だけではやってみたのですが、講師の先生を迎えた時に１品持ち寄りでもてなしをしてみたのですが、ものすごく喜ばれて、企画委員、私も企画委員と同じ目線なんですが、またこの自分たちの住んでいるところを見直せたというか、とてもいい機会があったりして、それを大きくしたい夢はありますけれども、どうでしょうか。まだ目論んではいません。

成田　限られた時間でのご意見をうかがうということで、大変、皆様方にマイクを回せなかったのが非常に残念なんですけれども、最後にこの山形学の企画委員を私と一緒にしています本田さんが今日、見えられていますので、自身の苦労話も一言だけお伺いします。

本田　今日は。苦労話というのをどういう立場でお話したらいいのか分からないのですが、どのような会も皆さんがすごくこう、やるぞという時には非常に盛り上がるのですが、リーダーシップをとってくださる方が、さきほどご病気を乗り越えてという報徳塾のお話もありましたけれども、たまたま都合でできなくなってしまうとか、情熱が３年ぐらいしか続かないとか、そういうことがあって、長く持続させていくことが経済的にもすごく難しいのではないかなということは、私自身がやっている細々としたボランティアの段階でも切実に感じています。今日、事例発表をなさってくださった２つの団体の方々も、結婚式のあいさつではありませんが、末長く、地域の方の力になるように、そしてまたご自身たちの力になるように頑張っていただきたいなと思います。

成田　ありがとうございました。先程来、私はあえて苦労話というように、苦労、苦労という言葉を発していたのですが、みんな企画されたり運営されたり、確かに苦労だと思うのですが、本田さんが言ったように長くやってくると、苦労話が笑い話になる時は必ずやってくると思います。それはなぜかというと、学びを実践した時に、ああ、あの時に苦労したけれども、やってみると非常に楽しかったというのは、たぶん報徳塾さんは、その段階に来ているのだろうと思います。グラウンドワーク庄内さんはこれから幾多の試練を乗り越えなければならない状況が見えたりもするのですが、やはり継続しながら地域の方々と一緒に、活動をしていただきたいなと思います。

予定していた時間が経過してしまいました。この後は隣の第一研修室で交流の時間となりますので、その場で、ここでは聞けなかったけれども実際どうなのかなというお話を皆さん方にお聞きしていただければと思います。本日は大変短い時間の中でなかなかスムーズにいかなかった司会を務めさせていただきましたけれども、今日、事例提供していただきました、報徳塾さん、それからグラウンドワーク庄内さんに感謝の意を込めまして拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。